

### 三 一生 学び続け

## 近代書道の基礎をきずいた

中 林 梧 竹 (一八二七〜一九一三)



晩年の梧竹(中林梧竹記念館所蔵)

みなさん、小学校三年生になると、習字の勉強がはじまりますね。

習字といえば、明治時代日本はもとより中国にまで名を知られた郷土出身の中林梧竹という人がいます。知っていますか。

では、どんな人で、どんな勉強をしたのか少し話してみましよう。梧竹は文政十年(一八二七)、現在の小城郡小城町本町に生まれました。今は、その建物はなく、「書聖中林梧竹生誕地」の碑が建てられています。

梧竹の先祖は松本城下(今の長野県)で、中林村の地頭でした。天正十年(一五八二)織田信長が松本城を攻めたとき、京都に難を逃れて住んでいたのを鍋島藩祖の直茂公に見いだされ、小城藩に仕えることになったのです。梧竹はその十三代目になり、本名を隆経、号(書の署名に使う名)を梧竹といます。

五歳のとき、岡山神社(小城町本町、小城藩祖をまつる)の境内で行われた「献書会」に出場しました。その当時は、村をあげての大きな行事で、子供から大人まで自由に参加できたのです。今でいえば「のど自慢」ならぬ、習字の「うで自慢」大会といったものでしょう。

梧竹は、並みいる大人の間小さな一休さんにも似たかわいらしい子供に見えました。ところが、畳一枚

ぐらゐの大きな紙に、自分の腕より大きな筆をにぎり、「えい！ やっ！」と力強く、堂々と見事に書き上げたのです。それを見ていた人々は、びつくり仰天。たちまち会場のあちこちでどよめきがおき、観覧席の小城藩主も何事かと、近寄つてみて、これまたびつくりしました。これこそが神が授けた子供「神童」の出現に村中がわいたといひます。殿様から褒美として米百俵（今の二百万円ぐらゐ）を成人するまでもらひ続けたと言われています。このことから梧竹の習字の腕前がいかにすばらしかつたかがわかるような気がしますね。

梧竹は、十五歳で現在の桜岡小学校の場所にあつた藩校・興讓館へ入学し、すばらしい成績をおさめました。十九歳の時、藩の命令により江戸へ留学しました。そして、当時日本で有名な書家市川米庵の一の弟子である山内香雪の門に入り、書道の勉強をしました。とくに、香雪に大いにみこまれて、自分のうちの養子にほしいとまで言われたほどでした。

梧竹は三十歳のとき小城に帰り、藩校の先生である指南役になり、藩主に仕えよく助けました。そのころの日本は、黒船の来航に始まつて、大政奉還、廃藩置県そして明治維新と、世の中が大きく変わつていくときでした。

梧竹は四十歳のはじめ、すべての職を捨て、ひたすら書道に打ち込む決心をしました。毎朝、町外れの清水観音の滝の水をくんで、どんぶり一杯の墨をすりました。そして、書いた紙が部屋に山ほど積み上がるほど熱心に練習しました。夕方になると、山となつた紙を家の前の川（祇園川）に運び、水に「ザブン」とつけ、それを引き上げ、少しずつ手でちぎり長い時間かけて水に流したそう



梧竹の作品「海外」・「飛香」（中林梧竹記念館所蔵）



梧竹が使用した道具(中林梧竹記念館所蔵)

です。

これは、おそらく貴重な反省の時間ではなかったかと思われま

す。このことを近所の人々は、

「梧竹さんの筆は洗ろうて、紙は流しんさっけんもう川下では洗濯されんばい。」

「梧竹さんは、氣狂いしとらすばい。」

「梧竹さんは、清水の滝は干す(硯の水を多量に使ったことのおおげさな表現)とじゃなかるうか。」

とうわさするほど練習にうちこみました。

て以来、一気に花開くことになったのです。  
 明治十五年(一八八二)、五十六歳で書道の本場中国に留学しました。なかでも北京では、毎日五合(約1リットル)の墨を使って練習し、中国人をおどろかせました。一年八か月中国にいましたが、中国第一流の書家同様大切にされたそうです。  
 帰国後は、明治の代表的な政治家で郷土出身の副島種臣、松田正久たちのお世話で、東京銀座の伊勢幸洋

が、明治十一年(一八七八)、長崎の清国領事館の理事官・余元眉に会



服店に住みこみ、その後二十九年間そこで生活を続けました。

梧竹は旅が好きで、暇を見つけては、旅に出かけました。旅に出かけると、自然との出会いがあり、またいろいろな人との出会いがあります。その中からさまざまなことを感じ、学んでいきました。それはちょうど画家が、大自然の雄大さや、自然の中に生きる動物などから影響を受けるように、梧竹の書にも大きな影響をあたえました。

梧竹は五十九歳のとき、明治天皇の前で揮毫をし、そのうまさを天皇からたいへんほめられました。その後も、八十歳で韓国に渡って書道のうでをますますみがきました。

八十歳を境に梧竹の書は大きく変わりました。韓国でヒントを得て、長い間使い慣れた長鋒(筆の毛先が長いもの)から短鋒(筆の毛先が短いもの)にかえたのです。八十五歳のころには短鋒による梧竹の書は頂点をきわめました。

梧竹は、八十七歳まで長生きをし、死ぬまで書道の研究を続けました。

※弘法様の後には自分のほかに書家はない、また「自分の書は百年の後になつたら、わかつてもらえるだろう。」と自信を持っていたそうです。

現在、久保田駅のすぐ北に建てられた梧竹観音堂に静かにねむっています。何事にも一生努力するということは大変ですが、努力に努力をかさねて、自分の信じる道をきわめていった梧竹。彼の生き方をみなさんはどう思いますか。



梧竹観音堂(小城郡三日月町久本)